

保健体育科の主張

著者	杉山 慎一郎
雑誌名	研究紀要：学びの自覚
巻	21
ページ	80-92
発行年	2021-03
出版者	静岡大学教育学部附属静岡中学校
URL	http://doi.org/10.14945/00028069

保健体育科の主張

杉山慎一郎

1 教科で育みたい人間像

人々が長寿となった近年において、生き生きと活力ある生活を送ることは誰もが願うことだろう。生き生きと活力ある生活を送るためには「取り組んでみたい」「挑戦してみよう」という気持ちになれるような心の状態や、行動にうつすことができる体の状態であることが大切だと言えるだろう。そのような心や体の状態であるためには、自らの生活に運動や健康的な生活を取り入れていくことが必要だと考える。運動や健康的な生活とのかかわり方は「する」「みる」「支える」など多様であるため、自分の生活を振り返りながら取り入れていくことが大切である。どのようなかかわり方においても、様々な視点から運動や健康的な生活について思考することが、継続的にかかわることにつながるだろう。一つの視点からだけではなく、様々な視点から思考することで、課題や解決策を見いだしたり、新たな発見をしたりすることができ、運動や健康的な生活に対して、爽快感や達成感、喜び、仲間との一体感などの心地よさを感じることができると考える。その心地よさは、心と体が一体となっている実感となり、運動や健康的な生活に継続的にかかわることを後押しするだろう。そして、自分自身で運動や健康的な生活に適した場所や環境を求め、運動や健康的な生活そのものにおもしろさや親しみを感じていくことにつながると考えている。

このようなことから、保健体育科が育みたい人間像を「生涯にわたって、自分（たち）なりに運動や健康的な生活にかかわっていく人」とした。子どもたちが、運動や健康的な生活そのものにおもしろさや親しみを感じ、心と体が一体となっている実感を得ながら、継続的に運動や健康的な生活にかかわっていくことを願っている。

2 教科ならではの文化

保健体育科ならではの文化とは「自分たちなりの合理的な動きや健康的な生活について新たな視点を得ながら思考し、体現しようとする営み」だと考える。自分たちの動きや生活に対して、課題や解決策を思考し体現しようとすることは、自分たちの動きや生活の変化を捉え、よりよくなっている実感を得るとともに、自分や仲間の違いを理解し、仲間と認め合うことにつながる。

保健体育科ならではの文化を味わうためには、自分（たち）が行った動きや生活に対して「もっとこうしてみたい」という思いをもつことが大切である。その思いは、動きや生活に対して、課題を発見し、解決策を考えることにつながるからである。子どもたちが思考した課題や解決策は、自分たちなりに思考した合理的な動きや健康的な生活と言える。体現しようとしたことから、自分たちなりの合理的な動きや健康的な生活が体現できていないと実感すれば、どこに課題があるのか、その課題を解決するために何を改善すればよいかをさらに思考し、体現しようとしていくだろう。自分たちなりの合理的な動きや健康的な生活が体現できている実感がもてれば、何度も体現できるような方法を思考したり、合理的な動きや健康的な生活を更新したりしていくだろう。このようにして思考と体現を繰り返すことにより、子どもたちは自分たちの動きや生活の変化を捉えながらよりよくなっている実感を得ていくとともに、自分や仲間の違いを理解し、仲間と認め合っていくのである。

課題や解決策について思考するときには、他者とかわることが大切である。なぜなら、他者とかわることで、自分たちが思考していなかった新たな視点から課題を発見したり、解決策を見いだしたりしていくことができるからである。また、自分たちなりの合理的な動きや健康的な生活は、年齢や体格、周囲の環境などによって変化していく。そのため、新たな課題が生まれ、解決策を思考し、体現しようとし続けることができ、生涯にわたって運動や健康的な生活にかかわることにつながると考える。

3 授業づくりで大切にしていること

保健体育科の願う子どもの学びとは、自分や仲間の動きや生活に対する考えの変化を実感し、互いに認め合い、爽快感や達成感、喜び、仲間との一体感などの心地よさを得ることだと考える。そのためには、自分（たち）の動きや生活を言語化し、イメージや映像、資料と比較することで、課題を発見することが

必要になる。そして、人間の動きや仕組み、運動の特性、自他の動きや生活に対する考えに着目して解決策を思考し、思考したことを意識して体現しようとすることにより変化を実感することにつながるのである。

子どもたちが、保健体育科ならではの文化を味わい学びを深めるためには、子どもたちが「こういう動きや生活をしてみたい」という思いがもてる題材づくりが欠かせない。題材づくりでは、題材そのものを選定することもあるし、題材に場の設定をすることもある。取り組んでみたいと思える動きや生活はイメージとなり、試行した動きや生活に対して、課題や解決策を思考することにつながる。そのため、子どもたちの実態を捉えながら、授業者が題材づくりをする必要があると考える。

試行した動きや生活に対して、子どもたちは疑問や気づき、課題を発見するだろう。そこで、**全体で共有する場を設けること**を大切にしたい。子どもたちの疑問や気づき、課題を全体で共有することで、子どもたちが何に対して思考するかを焦点化することができると考えている。何に対して思考するかが焦点化されていることで、子どもたちは互いの視点を受け入れることができ、思考したことを磨き合う学びにつながっていく。そのため、題材の初めに、何に対して思考するかを焦点化できるように全体で共有する場を設定したい。次に、互いに追求した視点を共有する場を設ける。子どもたちは、それぞれの視点で思考し、体現しようとしていく。追求した視点を共有することで、それまでに気づいていなかった視点から思考したり、自分たちの思考したことに対する根拠を明確にしたりすることができる。そして、新たな課題や解決策を見いだすことにつながるだろう。

以上のことを大切にし、子どもたちが保健体育の授業をおもしろいと感じ、仲間と認め合いながら保健体育科ならではの文化を味わい、学びを深めていくことを願っている。

実践事例

1 題材名 球技 ゴール型 ハンドボール— ずれから生まれるスペースを巡る攻防—（第 1 学年）

2 題材の目標

自分たちが行った試合の映像を用いて、ハンドボールの組織攻撃と組織防御にある局面を捉えながら課題を発見し、「組織攻撃と組織防御」について課題を解決する作戦を思考し体現しようとするを通して、仲間の特徴や役割分担、スペースに対する動き方、相手チームの動きの予想など様々な視点から、ずれから生まれるスペースを巡る攻防について考えを深めるとともに、自分や仲間の動きの変化を実感し、認め合うことができる。

3 題材観

(1) ハンドボールの成り立ち

ハンドボールの成り立ちは、古代エジプトの壁画に見られる球技であるなど諸説ある。ハンドボールが統一のルールを伴って始まったのは 19 世紀頃にデンマークで始まった「ハンドボル」、同時期にドイツで始まった「トーア・バル」であると言われている。デンマークでは「手でボールを扱えば足でボールを扱うよりも安全で正確にプレイできる」こと、ドイツでは「男性にも女性にも楽しめる球技である」ことを根本としてハンドボールは生まれた。そのため、手で扱いやすい大きさのボールや、広めのゴール、ボールを持ったまま歩ける歩数が多いことなど、取り組みやすさを考慮してルールが設定された。

つまり、ハンドボールには、競技そのものに、安全に誰にでも取り組めることや個人の技能、チームの戦術、作戦を発揮しやすいことに対する工夫があると言える。

(2) ハンドボールにある局面

ハンドボールには、フリースローやスローインなどの特定局面を除けば、大きく分けて「速攻と速攻防御」「組織攻撃と組織防御」という局面がある。

①速攻と速攻防御

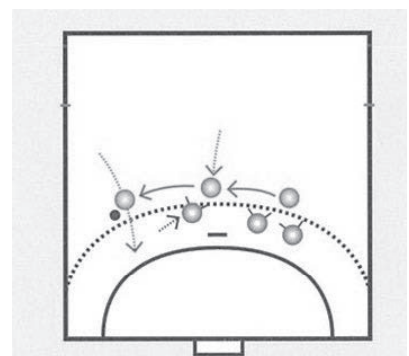
速攻と速攻防御の局面では、攻撃側からみればより速く攻めること、防御側からみれば攻撃を少しでも遅らせて組織防御にすることが必要になる。より速く攻めるためには、状況を把握して適切にプレイを判断していくことになる。判断に時間がかかれば相手が防御を整えてしまうことになるため、瞬間的な判断が必要になると言えるだろう。ドリブル、パス、シュートという選択肢の中で、ディフェンスの整い方を捉えてより速く攻めることは、個人の技術によるところが大きいと言えるだろう。防御側から考えても、自チームの帰

陣の速さや走っているオフenseの人数など、状況を捉え、攻めてきているオフenseに付くのか、パスコースをふさぎに行くのか、ゴール前を固めようとするのかなどを瞬時に判断していかなければならない。個人の判断と動きが、組織防御につなげることができるかの可否に大きく影響すると言えるだろう。

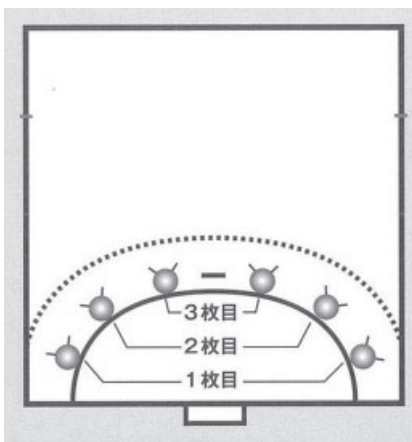
②組織攻撃と組織防御

速攻を守備が遅らせることができると組織攻撃と組織防御の局面へと移っていく。

組織攻撃は、攻撃位置に付いてパスを回し攻撃態勢を整える「ポジショニング」、6 対 6 の均衡状況を崩し、シュートをするのに有利な状況をつくりだす「きっかけ」、きっかけの動きを継続し、突破のチャンスをうかがう「展開」、きっかけや展開によってノーマークやシュートチャンスになる状況をつくりだす「突破」、得点をねらう「シュート」の局面に分けることができる。試合の中では、きっかけから突破につなげたり、展開からポジショニングに戻ったりするなど、この通りの順序にならない場合もある。「ポジショニング」「きっかけ」「展開」「突破」において、仲間と連携し、意図的な動きによってノーマークができるようにすれば、最終的な 1 対 1 の局面となる「シュート」の成功率が上がると言えるだろう。つまり、組織攻撃はノーマークやシュートチャンスをつくるために意図的に連携した動きをすることが重要になるのである。



組織防御は、組織攻撃の局面に対応して、攻撃のきっかけや展開にプレッシャーを加えて意図的な攻撃をさせないこと、シュート成功率の高いゾーンを守ることが重要になる。攻撃側が1対1でシュートの局面を生み出そうとしてくるため、組織防御では1対1の状況にならないように、オフenseに対してディフェンスの人数が多い状況をつくる必要がある。そのため、ハンドボールでは人を守るマンツーマンディフェンスではなく、場所を守るゾーンディフェンスが基本となることが多い。加えて、ハンドボールにはゴールエリアへの侵入を禁止するというルールがある。このルールがあることにより、ゴールエリアラインを背にすれば、ディフェンスは自分の後ろ側に走られる状況をつくらずに、前方の守備に集中することができる。そのため、人に付いて後ろのスペースを空けてしまう状況があるマンツーマンディフェンスよりも、ゾーンディフェンスが採用されていると言えるだろう。場所を守るゾーンディフェンスは、オフenseに対して1対複数の状況をつくりやすいというメリットがあり、1対複数であれば、個人の技術で勝る相手に対しても、守ることが可能になる場面が増えると考えられる。一方で、チームとしてどのように動くかという共通理解とコンビネーションがなければ、簡単にノーマークやシュートチャンスをつくってしまうというデメリットがある。そのため、チームでの共通理解とコンビネーションが欠かせないディフェンスシステムであると言えるだろう。



つまり、組織攻撃と組織防御の局面では、チームでの連携した動きが重要になるということである。

(3) ずれから生まれるスペースをめぐる攻防

ノーマークやシュートチャンスをつくるためには、スペースを生む必要がある。ハンドボールにおけるシュートは投げることであるため、投げるができる（腕の振りや踏み込みなど）だけのスペースを生み出すことができればよいと考える。ディフェンスとオフenseの距離を離せば当然投げるだけのスペースを生み出すことができるが、ゴールから遠くなくなってしまいうため、シュート

コースは限られ、シュートの成功率は低くなってしまいうだろう。ゴールにより近い場所では、ディフェンスと「ずれる」ことによってスペースが生み出されるだろう。オフenseに対してディフェンスが真正面に付けば、シュートを打つことはできないが、体半分ずれることによって腕を振るスペースが確保できる。そのため、オフenseから見れば、ディフェンス同士の間隙がスペースになるだろう。ディフェンス同士の間隙に飛び込み（きっかけ）、それを繰り返していく（展開）ことでスペースが広くなり（突破）、シュートチャンスをつくるのである。また、ディフェンスとのずれによって生まれるスペースは、横だけではなく、ジャンプすることで、高さによっても生み出すことができる。さらに、おとりになる人やドリブルでディフェンスを引き付ける人、後ろから飛び込んでくる人など、役割分担がなされれば、より多彩な攻撃が可能になる。

防御側から見れば、相手とのずれをなくすため、1対1ではなく、1対複数で対応して、間隙を埋めていくことが必要になる。オフenseの位置関係を把握し、どこにずれを生もうとしているかを考えながら、仲間と連携して間隙を埋めていくことになる。オフenseがどの間隙をねらっているかがわかれば、パスカットをねらうこともでき、相手のシュートチャンスをなくすことができるのである。

このずれから生まれるスペースをめぐる攻防は、自分の視野におさめやすいという特徴がある。攻撃側から見ても、防御側から見ても、間に人が挟まらないため、奥に広がる空間を認識する必要がなく、常に自分の目の前にあるスペースをねらったり、目の前にあるスペースを埋めたりすることで展開できるのである。そのため、攻撃守備ともにスペースを発見しやすいと言えるだろう。

(4) 本題材で味わう保健体育科ならではの文化

「自分たちが行った試合をもとに、ハンドボールにある局面を捉えながら課題を発見し、様々な視点からその課題を解決する作戦を思考し、体現しようとする」と本題材における保健体育科ならではの文化とする。子どもたちが、組織攻撃や組織防御にある課題に対して、チームとしてどのように解決していくかを考え、体現しようすることに期待している。

(5) 願う学びと子どもの姿

中学校において初めてゴール型の球技に取り組む子どもたちは、シュートを打つことに興味をもつだろう。ゴール型の球技では、シュートを打ち

得点をとることが楽しいと考える子どもたちが多くと予想されるからである。実際に試合を行えば、シュートを打ち、決まることに喜ぶ姿が見られるだろう。互いにシュートを決め合う試合が展開されれば、子どもたちは相手のシュートをどのように止めるかということを考えて始めるはずである。ディフェンスとオフェンスにずれがあり、スペースが生まれていることによって、シュートを打たれてしまうことに子どもたちが気づけば、チームで連携してスペースを埋めるための組織守備を考えていこう。子どもたちにとってチームで初めて考えた組織守備は、自分たちなりの合理的な動きである。自分たちの守備の動きの変化を実感しながら、組織守備が機能した達成感や仲間と協力して行う一体感を味わう姿に期待したい。

組織守備が機能してくれば、シュートは決まりにくくなっていく。一人でシュートを打つことに難しさを感じた子どもたちはチームでどのように攻撃するかということを考えていこう。守備での考えを応用して、シュートを打つためにはスペースが必要であること、スペースは守備とずれることによって生まれることに子どもたちが気づけば、シュートを打つ人やドリブルで引きつける

人、おとりになる人など、仲間の特徴を捉えながら役割分担を工夫し、組織攻撃における作戦を思考していこう。ハンドボールにある局面を捉え、それぞれが単独の動きでシュートを打っていたときの動きの変化を実感し、声をかけ合いながら表現しようとする姿に期待したい。

攻防両面から作戦を思考し、表現しようとする子どもたちは、自分たちの課題がどこにあるのか、課題を解決するためにはどのような作戦にすればよいのかを思考していこう。他チームの作戦を知り、自分たちの作戦と比較することで、子どもたちは様々な視点を獲得していくと考えている。そして、様々な視点から自分たちの課題に対して作戦を修正し、さらに表現しようとしていこう。思考と表現が繰り返され、さらに動きがよりよくなっている実感を得ていくはずである。

このように、本題材では「ハンドボールの局面を捉えること」「ずれから生まれるスペースをめぐる攻防について思考すること」「自分たちの動きから発見した課題の解決策を思考し表現しようすること」「互いの動きの変化を実感し、認め合うこと」で、達成感や仲間との一体感を得ること」が授業者の願う学びである。

参考文献：大西武三(1997)「ハンドボールにおける局面の構成について」 筑波大学体育科学系紀要
酒巻清治(2018)「ハンドボール基本と戦術」 実業之日本社

参考資料：スポランド https://www.homemate-research-gym.com/useful/19734_gym_004

4 学習指導要領との関連

E 球技

- (1) 次の運動について、勝敗を競う楽しさや喜びを味わい、球技の特性や成り立ち、技術の名称や行い方、その運動に関連して高まる体力などを理解するとともに、基本的な技能や仲間と連携した動きでゲームを展開すること。
ア ゴール型では、ボール操作と空間に走り込むなどの動きによってゴール前での攻防をすること。
- (2) 攻防などの自己の課題を発見し、合理的な解決に向けて運動の取り組み方を工夫するとともに、自己や仲間の考えたことを他者に伝えること。
- (3) 球技に積極的に取り組むとともに、フェアなプレイを守ろうとすること、作戦などについての話し合いに参加しようとする、一人一人の違いに応じたプレイなどを認めようとする、仲間の学習を援助しようとするなどや、健康・安全に気を配ること。

5 題材構想（全 10 時間）

- (1) ハンドボールに出会う
- (2) 組織防御について思考し表現しようとする
- (3) 組織攻撃について思考し表現しようとする
- (4) 組織攻撃と組織防御について自分たちの課題から作戦を思考し表現しようとする

6 本題材でみられた子どもたちのあわれ

(1) ハンドボールに会う

授業者は、ボール、コート、ゴールを準備して子どもたちを迎えた。子どもたちは、授業前からボールに触り、パスをしたり、ドリブルをしたりしていた。授業者はハンドボールという名称であるので、手でボールを扱うことを確認し「ボールを使って自由に動いてみよう」と子どもたちになげかけた。子どもたちは、シュートを行ったり、パスをしたりしながら、ボールに親しんでいった。中には、ゴールキーパーをする子どももいた。子どもたちは「シュートの打ち方」「ジャンプをしてシュートを打ってよいのか」「歩いてよい歩数」「ラインを踏んではいけないのか」「試合のルール設定」などを授業者に問いかけてきたので、授業者は一つ一つ子どもたちの疑問に答えた。「ゴールキーパーは痛い」という子どもがいたため、ブルーシートをゴールキーパーとして練習していくようにした。

しばらく思うように動いてみたところで、子どもたちに感想を尋ねると以下のように発言した。

- ・ジャンプをしたり、回転を加えたりすることでシュートに勢いが付く
- ・白線ギリギリのところでジャンプをしてなるべくゴールに近づいてシュートを打ちたい
- ・シュートはゴールキーパーのいないところに打つとよい
- ・ゴールキーパーのいないところは四つ角や足下である
- ・パスによってシュートが決まる
- ・仲間の少し前にパスを出すとシュートが打ちやすい
- ・ドリブルは行いにくい
- ・ラインのルールがわからない
- ・ゴールキーパーはかなり痛い
- ・試合ではどのようなルールを設定するのか
など

子どもたちから、試合について質問が出たため、授業者は次回から始まる試合のルールを確認した。子どもたちが題材を通して、組織攻撃や組織防御について思考していくことができるように以下のルールを設定した。

- ・コートはハーフコートとする
- ・プレーヤー4人で1チームとする
- ・ゴールキーパーはブルーシートとする
- ・ハーフコートラインでオフェンスがディフェンスとパス交換を1回してスタートする
- ・シュートは転がしてはいけない
- ・防御側がサイドラインからボールを出した場合

にはスローインで再スタートする

- ・ゴールエリアラインから内側にはオフェンスもディフェンスも侵入することができない
- ・相手をよろけさせてしまうような身体接触はファウルとし、相手の攻撃からスタートする

以下の場合には攻守交代する

- ・オフェンスがゴールを決める
- ・ディフェンスがボールを保持する
- ・ボールがアウトゴールラインを超える
- ・ボールをもって4歩以上動く
- ・ドリブルしたボールをいったん持ち、再び続けてドリブルする
- ・ボールを蹴る
- ・オフェンス側が時間を引き延ばすようにプレイしている
- ・攻撃側がサイドラインからボールを出す

ルールについて子どもたちと確認した後、グループ分けを行った。グループは男女混合にするという条件の下、ランダムで決定した。

グループ分けをした子どもたちと何を練習したいか確認すると「速く、強くシュートを打つこと」「どのようなパスを出せばよいか」という考えが出されたため、チームごと二つの課題に対して取り組むこととした。子どもたちは、同じチームになった仲間たちとコミュニケーションをとりながらシュート練習を行っていた。チームの仲間に投げ方やゴールのねらい方を助言したり、ドリブルがしにくいことを実感しパスをつなぎながらシュートしたりする姿が見られた。授業者はシュートに挑戦している姿勢を認めたり、質問をしてくる子どもに助言したりした。

試合への意欲が高まってきた子どもたちに授業者は試合を行っていくことを提案した。全9チームとなるため、8チームが試合を行い、1チームは試合のようすを視聴覚機器で撮影することとした。これは、試合のようすを撮影し、試合終了後に自分たちの動きを見ながら振り返ることにつなげたいと考えたからである。

前時において、ハンドボールではドリブルがしにくいことを感じていた子どもたちは、パスを中心に試合を行っていた。授業者はどのように動けばよいか戸惑っている子どもに対して「ゴールに向かって動くこと」を助言したり、子どもたちのプレイを認めたりしながら試合を観察した。試合を重ねる中で、攻撃や守備の動き方について仲間に助言する子どもたちの姿も見られた。また、それまでボールになかなか触ることができなかった子どもがシュートを打てた時には、歓声をあげ、

拍手をする姿も見られた。

攻撃の動きが少しずつよくなるにつれて、守備が誰かをマークしたり、パスカットをねらったりする姿もあった。

試合後には、自分たちの映像を見ながら、チームごとのふりかえりの時間を設けた。授業後の追求の記録には以下のような記述があった。

- ・パスをキャッチすることが難しい
 - ・周りに人がいない時にはドリブルをして、相手がいなくてパスを出した方がとられにくい
 - ・パスが通らない原因はパスの速さや、もらう人の周りに敵が集まっていることだ
 - ・コート全体を使って動くことができなかった
 - ・ボールを逆サイドにつなぐと得点につながる
 - ・初めのパスから次につなげることが難しい
 - ・左右に二人ずつ置くことで、味方にパスがしやすくなる
 - ・マークする人を決めるなどディフェンスについて考える必要がある
- など

授業者は子どもたちが試合を行った後にふりかえったことを全体で共有する時間を設けた。子どもたちからは以下のような発言があった。

攻撃

- ・仲間との距離感を考えてパスの強さを決めたい
- ・ディフェンスがとりにくい所へパスをする
- ・ボールを持っていない人が相手のいないところへ動く
- ・仲間との距離感によってパスの遠近を使い分けたい
- ・バウンドパスや高いパスを使い分けたい
- ・遠くに散らばることでパスコースが作りやすい
- ・逆サイドを使うことでコートが広く使える

守備

- ・相手チームの一人一人にマークをつけたい
 - ・パスカットをねらって攻撃につなげたい
 - ・パスカットにはミスしたときに相手のチャンスになってしまうというリスクがある
 - ・オフense一人に対して、二人で守ることが重要だ
- など

授業者は子どもたちの発言を受け、攻撃では「仲間と連携してスペースを利用した攻撃をす

ること」、守備では「相手をゴールに近づけず、人数差を有効利用すること」を追求していくことを子どもたちと共有した。攻撃に対する発言が多く見られたため、攻撃の動き方について追求できるよう授業者から同じチーム内で2対2で攻防することを提案し活動した。2対2にすることにより、全員がボールにかかわる動きをする必要があり、子どもたち一人一人が攻撃の動き方について考えることができると考えたからである。

全体共有をした後の子どもたちは、ボールを持っていないときに空いたスペースに飛び込む動きをしたり、フェイントを掛けてボールをもらおうとしたり、仲間に指示を出してパスをしたりしていった。また、今までなかなかボールを受けることができなかった仲間がシュートを打つと、歓声を上げて喜ぶ姿も見られた。

授業者は、パスカットをされてしまったときにどのように動けばよかったのかを子どもたちに問いかけたり、どのように動いてよいか迷っている子どもに声を掛けたりした。

授業後には子どもたちから以下のような記述が見られた。

- ・たくさんパス回しができてうれしかった
 - ・ゴールの前において、仲間からのパスをキャッチして反転してシュートを打ちたい
 - ・困ったらボールを後ろに戻して立て直すことも考えたい
 - ・シュートを打つ場所は斜めよりも正面の方が入りやすいことがわかった
 - ・自分から動いてボールをとれる位置に行くことが大切だとわかった
 - ・仲間の特徴をわかったうえでパスを選択していきたい
 - ・シュート直前でも手や体を使ってシュートを入りにくくすることができる
 - ・ディフェンスは数的優位になり、アプローチとサポートをしていけるとよい
 - ・守備の時にゴール近くにいる方がディフェンスがしやすくなる
 - ・仲間のよいプレーを自分が演出すると思えばよいチームになる。自分だけでやっているわけではないということを理解して試合に臨みたい
- など

(2) 組織防御について思考し体現しようとする

授業者は、前時の試合のふりかえりを共有することを提案した。子どもたちからは以下のような発言があった。

攻撃

- ・シュートの直前にフェイントをするとフリーの時間が長くなる
- ・視線でもフェイントを掛ける必要がある
- ・フェイントは二つの動きを組み合わせることである
- ・フェイントを掛けるためには、チームで作戦を考えた方がよい
- ・パスをもらい、すぐにパスを出す判断をしたい
- ・そのためにはそれぞれがバラバラの位置にいる必要がある
- ・実現可能な動きを取り入れていくべきだ
- ・仲間の特徴を捉えたうえでプレーを選択できるとよい

守備

- ・相手の前に立って早くプレーの邪魔をしたい
- ・マークを決めておいても外されてしまう
- ・数的優位をつくるためにはどのようにすればよいのだろう
- ・ゴールの近くにいた方が相手の邪魔をしてボールをとりやすいと感じた

など

授業者は、子どもたちの発言から守備に課題が多いことを確認し、動画資料を見ることを提案した。動画資料を見た子どもたちに、気づいたことをたずねると以下のような発言があった。

- ・ゴールの近くでシュートを打ちそうな人をマークしていた
- ・ボールを持っている人の前にある隙間をなくす
- ・ゴールと相手の直線上に立つことが大切だ
- ・ボールを持っている人をマークするのではなく、その場所にきた人のプレーを邪魔していた

など

このような気づきを得た子どもたちに授業者は人に付くディフェンスをマンツーマンといい、場所につくディフェンスをゾーンということを確認した。そして、チームごとにホワイトボードと8体ずつの人形を配付し、作戦を考えていくことを提案した。

子どもたちは以下のような対話をしながら作戦を練り上げていった。

- ・映像では一人か二人がマンツーマンになり、残りがゾーンをしていた
- ・マンツーマンをすることでパスを出しにくくしてその後のゾーンが守りやすいことにつなが

っているのではないか

- ・私たちは四人だから一人がマンツーマンで残りがゾーンをしてはどうか
- ・マンツーマンの人はパスカットをねらって、ゾーンの人にはシュートを打たれる前に人と人のすきまをなくすことを意識しよう
- ・相手の攻撃からスタートするときには必ず真ん中からになるので、そこに二人の人をつけてパスコースを限定することはできないか
- ・残りの二人が相手の一番ゴールに近い人のラインで並んでみてはどうだろう
- ・そうすると後ろにパスをされてしまったときに対処できないのではないか
- ・パスコースを限定しているから遠くに投げられることは減るのではないか。その場合、あまり後ろに下がってパスをつながれてしまうよりも前にいる方がメリットが多い
- ・最初のパスが通ってしまって、パスがつながりだしたら、投げる人に付いていた二人はどうするのか
- ・その場合はボールを持っている人に付くようにすればよい

など



授業者は子どもたちが考えた配置の意図を引き出したり、具体的な動きが共有できているかを確認したり、相手の動きを想定するように促したりした。また、子どもたちが次時以降に自分たちの考えた作戦を確認することができるように、作戦ボードを撮影した。



授業者は、前時に撮影した作戦ボードの写真を各チームに配付し、守備の作戦を確認した後、試合を行うことを提案した。

子どもたちは、自分たちが思考した作戦を体現しようとして声を掛け合いながら試合を行った。授業者は、作戦通りに守備が動いている場面で子どもたちを称賛したり、どのように動いてよいかわからなくなっている子どもに、作戦を確認したりした。子どもたちからは、試合と試合の間の時間に、自分たちの考えた作戦を見直し、改善しようとする姿が見られた。いくつかの試合を行った後に試合で感じたことを全体で共有すると以下のような発言があった。

- ・ 囲まれてしまうとプレーが制限される
- ・ 攻撃も守備も動き続ける必要がある
- ・ ディフェンスの三角形の中心に走り込む
- ・ コート全体を使うことができていないので広がりた
- ・ 相手の攻撃の動きに惑わされてフリーの人が生まれてしまった
- ・ ゴール前に簡単に近づけすぎると、シュートを打たれてしまう
- ・ 二人はボールを持っている人について残りの二人はゾーンで守るとバランスがよい
- ・ 相手が攻めることを前に立って止めたい

など

授業者は、子どもたちが発言する内容を全員が理解できているかを確認し、動きを具体的にイメージできていないときには、実際に動いたり、板書したりして共有した。そして、子どもたちの発言を受けて「自分たちに実現可能であること」を踏まえて作戦を話し合うことを提案した。

子どもたちはホワイトボードを用いて、チームの課題を確認し、作戦を修正していった。前時において守備が機能していると実感しているチームには攻撃の作戦を考えてもよいこととした。

作戦を思考した子どもたちが動き出そうとしたところで再度試合を行った。

子どもたちは自分たちの作戦を体現しようと、より積極的に動いていた。授業後の「追求の記録」には以下のような記述があった。

- ・ ゴールを守るという意識が強すぎて、対人のことを考えることができていなかった。人の配置を変えたい
- ・ 人のどこに付くのかまで考えたい。利き手の方につけば、相手はプレーしにくくなる
- ・ これまでで一番よいプレーができた。ボールを持っている人に二人がつくことで、パスをつな

ぎにくくすることができた

- ・ 相手の守備の動きがよくなってきたので攻撃がしにくくなった。どうしたらパスが確実に通るのだろうか
- ・ シュートが入らないので、シュートを打つ人を決めてもよいかもかもしれない
- ・ 色々なところに動いてもパスがもらえないときには、どうすればよいのだろうか
- ・ パス回しを速くして、ボールをとれるようにしたい
- ・ ゴール前に人がいるとそこで必ず止められてしまうので、フリーの人にパスをしたい。ドリブルをすることでおとりになることもできそう
- ・ 四人でばらけてZ型になることで反対側にパスをしたり、マークを振り切ったりしやすくなった
- ・ 今回は課題がたくさん出てきた。相手も作戦を考えていて強くなったからだと思う。チームの四人全員が共通の意識をもつことが大切だ
- ・ 今まで自分だけの独走が多かったけれど、仲間を信じ続けることでプレーが成功した

など

(3) 組織攻撃について思考し体現しようとする

自分たちが行った試合から見いだしたことを全体で共有すると以下のような発言があった。

- ・ ドリブルは相手を引きつけるおとりになる
- ・ 高いパスはとられてしまうので低いパスをだす
- ・ 誰にパスをするか見破られてしまうので、相手をだますことが必要である
- ・ ボールを長く持っているとうまわれてしまうので、すぐにパスを出す。そして、パスを出した後にすぐに動くことが大切である
- ・ 利き手を踏まえて守備をする
- ・ 一人がパスコースをきって、もう一人がサポートする
- ・ スペースを空けないために、エリアで考えたい
- ・ よく動く人をマークすることで、相手の選択肢を減らしたい

など

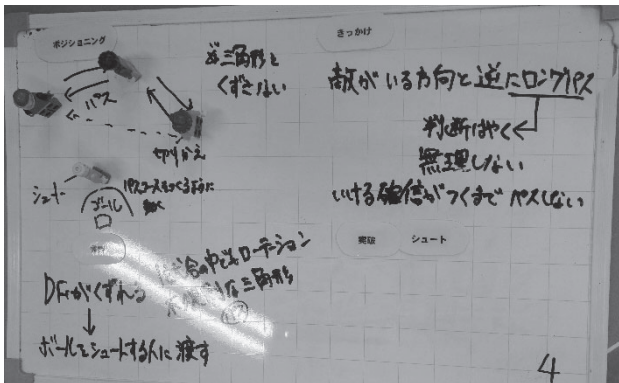
攻守につながることをして「相手の特徴を踏まえること」「攻守共にパターンを準備して使い分けること」が大切であるということ全体で共有した。授業者はこの発言を価値付け、子どもたちがまだパターンが定まっていない攻撃について作戦を考えていくことができるように、フォーメーションオフenseをしている動画資料を提示

した。動画資料を見た子どもたちからは以下のような発言があった。

- ・始めに 3 人が一直線に並んでいた
 - ・パスを回しながらじりじりディフェンスにせまっていた
 - ・素早いパスを何本も回すことで的を真ん中に集めていた
 - ・走りながらパスをしていた
 - ・ボールと逆方向に動くことでマークが外れる
 - ・端に人がいることで、スペースが生まれフリーになっていた
 - ・ゴールキーパーエリアを使ってシュートを打っていた
- など

授業者は子どもたちの発言を「ポジショニング」「きっかけ」「展開」「突破・シュート」の局面に分けて板書し、子どもたちに局面を整理しながら攻撃の作戦を考えていくことを提案した。

子どもたちからは、自分たちの動きを局面ごとに整理し、具体的な場面を思い浮かべながら対話する様子が見られた。授業者は、子どもたちの考えが引き出せるように、それぞれの場面で、一人一人がどのように動いていくのかを問いかけていった。



授業者は再度作戦を考えた子どもたちに試合を行うことを提案した。前時に撮影した作戦ボードの写真を各チームに配付し、攻撃の作戦を確認した後、試合に入った。

子どもたちは自分たちの作戦を一つ一つ確認しながら、試合を行っていた。その中で、シュートがうまくいかないことや作戦通りに動くことがよいのかについて発言した子どもがいたため、授業者は一度試合を止めて「シュートを打つ前にフリーの状態をつくられていることに価値があること」「臨機応変な動きは作戦があるからこそ成り立っていること」を全体で確認した。守備の作戦を体現しようとしているときと同様に、子どもたちは自分たちの作戦を修正しようとして声をかけあって試合を行っていた。授業者は、子どもたち

がフリーの状態シュートを打つことができている姿を価値付けた。試合を行った後の「追求の記録」には以下のような記述があった。

- ・オフenseの時に、後ろからゴールに向かってパスを出すと、ディフェンスの人が前に居ることが多くて、パスが通った。また、ゴールから斜めの位置にポジショニングすると相手を引き付けることができる。
 - ・作戦を細かく決めることで、敵にパターンを読まれることなく、パスが通った
 - ・三人が集まって、敵を引き寄せおくと、サイドにいる一人がフリーになることができる
 - ・ドリブルはおとりになるため、ドリブルをするときとパスを出すときの判断をしたい
 - ・フリーになれることはたくさんあったが、ボールをもらった後にどこにパスをするべきかがわからなくなってしまう
 - ・前回よりもボールを追いかけることができた。自分を含めて、全体が動くことが大事だ
 - ・ディフェンスの時にはぴったりつくのではなく、パスをあえてさせるようにしてパスカットをねらうことができる
 - ・相手の最初のパスが通ると、シュートまでつながってしまう場面があった。ディフェンスのポジショニングを考えたい
 - ・相手のドリブルを止めても、ボールを後ろに回されて、うまく攻められてしまった。パスをカットする方法を考えたい
 - ・一人に任せっきりになるのではなく、四人全員を最大限活用したい
- など

(4) 組織攻撃と組織防御について自分たちの課題から作戦を思考し体現しようとする

オフenseの動きに気づきがあったり、課題を感じたりしている子どもたちに、授業者は作戦を思考することと試合を繰り返すことを提案した。前時における課題から作戦を考える時間を設けた後に、同じチームと連続して試合を行い、その間に作戦タイムを設けることとした。その際、子どもたちが自分たちの動きを整理しながら作戦を考えることができるように「攻撃にはポジショニング、きっかけ、展開、突破、シュートという局面があること」「守備にはゾーンとマンツーマンがあること」を再度確認した。また、子どもたちの「追求の記録」に書かれていた「四人を最大限に活用すること」を価値付けた。

以下は、最初の作戦を考える時間と試合間の作戦タイムにおける子どもたちの対話である。

チーム a 最初の対話

- ・ポジショニングはよいと思う
- ・展開からきっかけに課題がありそう
- ・相手チームがドリブルから展開している
- ・自チームはパスで攻めている。パスがつながるはずなのにつなげていない
- ・たくさんの人が集まってきて、固まってしまうとパスが出せない
- ・頭の上を越すパスを使ってみてはどうか
- ・頭の上を越すパスはカットされてしまう可能性が大きい
- ・みんなが一カ所に固まった状態でパスを受け取ろうとしている。だから突破につながらない。ドリブルを増やすことでコートを広く使えるはずだ

チーム a 試合間作戦タイムの対話

- ・ドリブルとパスをどのように使い分けたらよいのか
 - ・今回はシュート数が少なかったからシュートを増やしたい
 - ・きっかけのところはよかったと思う
 - ・半分までドリブルをして、人が集まってきたら動いてパスをしてみてもどうか
 - ・囲まれてしまう前にパスを出したい
 - ・ドリブルを少なくしてみてもどうか
 - ・ドリブルする人を決めよう
- (試合を行う)
- ・上のパスよりも下のパスを使おう
 - ・パスでつまったら後ろにパスをしたい
 - ・パスを後ろに戻そうとしても囲まれてしまった
 - ・そういうときはAさんにパスをしてドリブルをしてみよう
 - ・Aさんにパスをしようとしても相手がディフェンスをしてくる
 - ・止まってボールを待つのではなく、動いてパスをしたり、もらったりした方がよい
 - ・パスミスは減っている。シュートが入らなくてもチャンスが増えているからよいはずだ

など



チーム b 最初の対話

- ・最初ボールを持っている人に対して二人でディフェンスしてみてもどうか
- ・二人ディフェンスを付けてしまうと一人がフリーになってしまいパスを通されてしまう
- ・Aさんならしつこくディフェンスにつくことができるから、Aさんが一人でマークすることにしてはどうか
- ・確かに前時でAさんは敵にしつこくつくことができている
- ・もし抜かれてしまった場合にはマークする人をスイッチしよう
- ・スイッチするのであれば、両サイドでマークしている人が中央に寄ってみてもどうか
- ・そうするとサイドにいる敵が中央よりに入ることができてしまうから、両サイドの人はマークを外さないようにしよう
- ・オフェンスは二人が中央でパス交換をして進む
- ・パスを出した後にマークに付かれたらどうするのか
- ・その場合は、後ろに回ってみてもどうか
- ・上を通すパスを出せば、抜くことができる
- ・もし二人でのパス交換ができなくなったらサイドにもパスを回してほしい
- ・後ろに戻ってパスをもらう動きをしよう
- ・サイドにいる人が逆サイドに動くのはどうか
- ・右利きの人は左サイドにいた方がよい
- ・一度左サイドの人にパスを出して、中央にパスをもどそう

チーム b 試合間作戦タイムの対話

- ・ここからパスをたくさん出してみよう。パスできっかけをつくり、パスで展開しながら攻めたい
 - ・やはりサイドにパスを出すと中央が空きやすくなる
 - ・ポジショニングは変えずに、きっかけは中央にいる二人でしよう
 - ・展開の時にサイドを使うようにしよう
 - ・突破をパスにするか、ドリブルにするか
 - ・Cさんにシュートを打ってもらおう方がよい
 - ・サイドに人が行くと、ディフェンスが集まってくる
 - ・サイドで縦の動きをするとより中央が空きやすくなる
 - ・中央で空いたスペースに誰かが入ってそのままシュートを打とう
- (試合を行う)
- ・一人でドリブル突破はミスをしやすい
 - ・両サイドが前に行けば行くほど囲まれやすくなる

る

- ・その動きで中央をあけるのではなかったか
- ・中央が無理なときはサイドが前が出る動きをしてはどうか
- ・左サイドにディフェンスが来たら、右サイドにパスを出してみよう
- ・ディフェンスが中央側につくかサイド側につくかによって動き方を変えてみよう
- ・このフォーメーションだと二人で攻めることが増えてしまうので、センターラインに四人が並ぶフォーメーションにしてみよう
- ・パス交換を四人でしながら前に進んでいく
- ・ディフェンスがパスカットをねらいやすくなってしまわないか
- ・相手のディフェンスがどのように動くのか想定しにくい
- ・このフォーメーションは使いにくい
(試合を行う)
- ・一列でポジショニングすると、パスカットされやすくなってしまふ
- ・前に決めたポジションと一列のポジションを使い分けてみる
- ・動きが組み合わせればよりディフェンスは動きがわかりにくくなるはずだ

など

- 切だ。サイドから攻めることで、最後に中央から突破しやすくなることがわかった
 - ・授業ごとに作戦を改善していくことが楽しかった。相手チームによって作戦を変えていくことがハンドボールでのやりがいになる
 - ・ハンドボールを通して仲間と協力し作戦を立てることで、強くなれるということがわかった。作戦が成功するととてもうれしかった
 - ・たくさんのパターンを考え、場合により使い分けることがハンドボールだけでなく、どのスポーツにおいても大切であると感じた
 - ・人それぞれ役割が違うのでそれを理解し、ゴールに向かっていくことが大切である。みんなが活躍することができればよりよいものになることがわかった。また、仲間がいることでできることが増え、視点を変えて考えなおすとよりよい作戦が生まれると思った
 - ・自分自身が運動が苦手であるが、運動が苦手でも苦手なりに動いてチームの役に立つことができるのだと感じた。チームで行うスポーツはできる人に任せるのではなくて、自分にできることを考えてチームであることを大切にしたい
- など

授業者は、それぞれのチームの作戦を把握しつつ、その作戦が体現されている姿を賞賛した。対話の場面においては、どのようにすればよいか困っているチームや試合の中で積極的に動いているチームにかかわり、新たな視点から作戦を提案したり、価値付けたりした。



このように思考と体現を繰り返した子どもたちは、最後の「追求の記録」に以下のように記述した。

- ・人を三角形に配置し、人と人が重ならないところにパスを出すとよかった。敵だけでなく、味方の動きも予想する必要がある
- ・ボールをパスした後にすぐに動き出すことが大

成果と課題

1 成果

(1) ハンドボールにある局面とずれから生まれるスペースが結びついて対話がなされたこと

試合と作戦タイムを繰り返している場面での子どもたちの対話からは、どの局面では作戦が体現できていて、どの局面に課題があるのかを整理していることが伺える。ハンドボールにおける局面を捉えて対話がなされたことは、授業者が題材を構想する際に願った学びであり、子どもたちからその学びのあらわれが見られたと言える。さらに、局面ごとにどのように動くかについて思考することで、スペースを生み出し、そのスペースを利用する対話がなされている。課題を発見するだけでなく、作戦を思考することにもハンドボールにある局面を捉えることが生かされており「ハンドボールにある局面を捉えること」と「ずれから生まれるスペースについて思考すること」を結びつけて子どもたちが学んでいることが明らかになった。

(2) 自分たちの動きから課題を発見し、作戦を思考することと体現しようすることを繰り返していくことが、達成感や仲間との一体感につながる

題材の最後に書かれた子どもたちの「追求の記録」からは、仲間と共に様々な視点から作戦を考え、体現しようとしていくことを繰り返すことにより、自分たちの作戦がよりよくなっている実感を得ていることがわかる。授業者は題材の構想段階で互いの動きの変化を実感し、認め合うことが達成感や仲間との一体感を得ることにつながると考えていたが、思考と体現を繰り返すことは達成感や仲間との一体感につながることを子どもたちのあらわれから見いだすことができた。子どもたちの記述に見られるように「勝敗」だけでなく「作戦の成功」に達成感を感じていることも注目すべきである。授業の対話でも「シュートは入らなくてもシュートチャンスが増えているからよい」という発言があったように、子どもたちが結果だけでなく過程に目を向けることができると、達成感を得られることが明らかになってきている。作戦が成功したことにより別のフォーメーションを考え始めた子どもたちがいたこともあわせて考えれば、作戦を思考し体現しようとすることで達成感や仲間との一体感を感じることは、さらに作戦を思考しようとする思いにもつながっていくと言えるだろう。

(3) 相手チームの作戦から視点を得たり、相手チームの分析を行ったりする姿が見られたこと

前時における相手チームの動きを参考にして自分たちの作戦を思考したり、自分たちの試合がない時間に他のチームの試合を見て、ポジショニングやスペース、スペースを生かす動きについて対話したりする子どもたちのあらわれが見られた。試合をしていない子どもたちが、試合をしている子どもたちに賞賛する声かけをする姿もあった。このようなあらわれは「みるスポーツ」につながる大変重要な学びであるとともに、(2) であげた達成感を得ることにもつながっていくだろう。題材構想の段階で、本題材で願う学びとして想定していなかった学びのあらわれであり、子どもたちからこのような学びのあらわれが自然とみられたことは大きな成果である。

2 課題

(1) 仲間を賞賛する場面の設定

作戦を思考する対話の場面や「追求の記録」を記述する時間において、仲間の動きを賞賛する子どものあらわれは見られなかった。授業者は互いの動きを認め合うことができるようチームで集まって「追求の記録」を記述するようながかけたが、その場面で仲間と対話する様子はほとんど見られなかった。前研究において仲間に認められることが技術を向上させるきっかけになることが見いだされている。子どもたち同士で互いを認め合う時間をどのように設定していくのか、どのようにすれば子どもたちが互いの動きを価値付ける姿勢をもつのかについては、さらなる実践が必要である。

(2) 自分のチームだけでなく、学級全体で作戦をよりよくしていく意識の醸成

子どもたちからは成果の(3)にあるように、本題材において、相手チームから視点を得たり、分析したりする姿が見られた。作戦を思考し、体現しようとしていく子どもたちは、自分たちの作戦を秘密にしておこうと考えがちであるが、学級全体で作戦をよりよくしていく意識が醸成されれば成果の(3)のあらわれはさらに増えていくと考える。そのため、作戦を思考する視点を共有したり、相手チームの作戦を賞賛したりする場面を設定するなど、子どもたちの意識が醸成される手だてを考えていく必要がある。